

OCFC INFORMATION

アトピー性疾患の増加は抗生剤の多用が原因か — 過ぎたるは及ばざる抗生物質 —

OCFCでは鼻水・咳・発熱など感冒様症状で来院された患者さんにできるだけ抗生剤を使用しないようにしております。これは感冒様症状をもたらす原因がほとんどの場合は、ウイルス性疾患だからです。ウイルスには抗生物質は効果がありません。多くが自然に治る疾患で、時間が解決してくれます。患者さん自身の力で治ることにより免疫力が增强して強い身体となっていきます。具体的には突発性発疹症、おたふくかぜ、感冒性嘔吐下痢症、ヘルパンギーナ、手足口病、プール熱等には抗生剤は無効であり、まったく必要ありません。

ではどうして今まで抗生剤をよく使っていたのでしょうか。それは患者さんの状態が抗生剤が効く細菌感染症との区別ができないとき、または混合感染といってウイルス感染症で弱った体に細菌がさらに感染するのを防ぐ、いわゆるこじらせるのを防ぐために使用していたのです。しかし使用するべき患者さんを選択せず、みだりに乱用しますと次第に抗生剤が効かない、すなわち耐性菌の出現が起こります。また抗生剤の使用は体の中にある、有益な細菌までなくしてしまい、ときには血が止まらない状態にもなります。さらにこの有益な細菌は体の中のリンパ球でアトピーにならないように働く細胞(Th1細胞)を増やすように働きます。従って抗生物質を特に乳児の頃から使用しているとこの細胞が減少して、アトピー体質になる可能性が高まります。この様な理由でOCFCでは抗生剤の使用をできるだけ避けるようにしています。過ぎたるは及ばざる抗生物質というところでしょうか。溶連菌感染症や尿路感染症、肺炎、化膿性疾患(皮膚、ものもらい、中耳炎)などではもちろん抗生剤の服用が大切です。OCFCでは抗生剤を使用するとき、しないときできるだけその理由を説明しております。納得いくまで質問してください。ちなみにアトピーにならない様に働くTh1細胞は麻疹やA型肝炎、BCGでも増加するといわれています。乳児の頃からの保育器等での集団生活、兄弟が多いこと、過度に清潔にしないこともTh1細胞をふやしアトピーにならない要素のひとつのようです。

感染症 だより

インフルエンザの終焉 4月に入りインフルエンザは急速に減少しました。3日に2名、7日に4名、14日に1名のインフルエンザB感染者の診断を最後に来院されていません。結局今年のインフルエンザ感染の方は105名でした。感冒性嘔吐下痢症の方も3月までの3分の1となり、4月より6月まで月に30~40名でした。一般に以前より軽症化しております。

根強いおたふくかぜ、水痘、溶連菌、意外に多い麻疹 季節性は無く、保育園・幼稚園単位で小流行が見られている感染症に、おたふくかぜ、水痘、溶連菌感染症があります。おたふく、水痘でそれぞれ30名くらい、溶連菌では4月10名、5月7名、6月4名となっています。溶連菌の診断は検査キットを用い、15分で診断しています。麻疹が6月に5名受診

→次頁へつづく

コラム

Th1細胞:リンパ球のなかのT細胞をTh1細胞とTh2細胞にわけます。Th1細胞は体に侵入した異物を直接攻撃する細胞で、Th2細胞はB細胞に抗体を作るように指示する細胞です。Th2細胞が増えると抗体が増えますのでアトピーの原因となるIgE抗体も増えるわけです。Th1細胞が増えるとTh2細胞は減少しますし、Th2細胞が増えるとTh1細胞は減少します。まさに遊園地のシーソーといったところです。

院内機器

院内設備:隔離感染症室、電話自動予約機(24時間対応)、空気清浄装置(臓器移植にも対応できる)
検査機器:レントゲン装置、自動解析装置付心電計、自動血球分析器、自動検尿器、電子スライドメーター、血糖測定器、経皮酸素分圧モニター、24時間酸素分圧モニター、聴力検査機等